

---

# 葛藤の春

からたちみかん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

葛藤の春

### 【著者名】

からたちみかん

### 【あらすじ】

公園のベンチの上で繰り広げられる葛藤劇。春なんて嫌いだ！！

子供の頃、母が皿洗いをしている時に聞こえてくる力チンカチン  
という音が好きだった。左手の薬指につけていた結婚指輪が皿に当  
たる音だ。三十回目の春を迎えた私が皿洗いをしても、力チンカチ  
ンという音はしない。

未だ独身。

彼氏もなく。

「う~ん」

唸り声を上げてかざした手はそれにしても色氣もないぼっぢやり  
とした指だ。しかも指輪などという洒落たものはしていない。まし  
てや結婚指輪というものの存在は程遠い。

「結婚したい」

「彼氏もいないのに?」

何が悲しくてこんなことやっているのだろう? 空を見上げる。  
春特有の霞んだ青い空と薄紅色の桜は、可も無く不可もなくぼんや  
りとした風景の中に溶け込んでいた。

そんな中真つ昼間の公園でベンチを陣取つて缶ビールを飲んでい  
る。

まったくもつていい御身分だ。

「そこからはじめなければならないのはわかっていますけど。皿洗うと  
きに力チンかチンつて音がしないんだよ。三十過ぎてだよ? 虚し  
くねえ? そう思つたら急に結婚願望沸いちゃつたの!」

叫ぶように言つた声も曖昧な景色の中に吸い込まれていく。通り  
すがりのサラリーマンが怪訝な顔している。

「彼氏いない歴と年齢が一緒なんだよ!? 見事なまでに男経験少  
なこうえに男嫌いなあたしが結婚したいって言つてるんだよ!?」

「まあ、落ちつけや」

冷静に突つ込んだ声も言葉もおぼろげな青い空にかき渢されてゆく。

「お主の奥手にも困つたものよのう。やつぱりあのときの男を無理矢理にでも押さえておけばよかつたものを」

「だつて、えつちしたとたんにさめちゃつたんだもん。しゃーないやんけ」

なぜかエセ臭く関西弁になつてしまつ。

かつて好きだつた人のことを思い出す。

子宮が燃え上るような恋をしたことがあつた。ベタにバレンタインデーにラブレターを仕込んだつけ。答えは『付き合えません』玉砕だつた。けれども好きで追つかけていた時は楽しかつた。

あげく押し倒して奪われた処女ならぬ、奪つた童貞ときたもんだ。年下だつたからなあ。

好きだつたという強烈な想いは確かにいい思い出だ。何が悲しいかといえば童貞を奪つたとたんにその情熱が失せたことである。

ああ、セックスなんてこんなものか。

まるで不感症みたいだな。

こんな冷静になつてしまつては発展するものもしない。幻滅してしまつたというのならどれだけ自分は理想が高いのか。

結局付き合つまでには至らないうちに『もう会うのはよそう』と、メールがきたのだから一度フラれたことになる。そんな汚点を残すことには耐えられなかつた若かりし日の自分は『恋人ごつこはもう終わりと』返信して、履歴も電話番号もメールアドレスも削除した。

なかつたことにしてかつたクセにその傷から立ち直ることもなく以来現実的な部分で好きな人すら出来やしない。

「六年前の傷！－ そんなに抉んなくてもいいじゃんか！－」

「自分で抉つてるんでしょ！－」

「そただけどさあ」

春なんて嫌いだ。何が悲しくて春にフラれなきゃならんのだ。

そもそもだ。何で春が巡ってくる度に男嫌いだと自覚して凹まなくてはならないのか。眺めているだけなら好きな人もいるけれど（偶像の領域）いざ触れるような位置にくると鳥肌が立つのだから体は正直なものだ。

「はあ……」

ため息ひとつ。

それにしても生暖かい。マッタリとしずきっこる。眠いし、だるいしで体の調子まで狂ってしまう。

缶ビールを煽りながら桜を見上げる。

「桜つてさ、確かにこうやって見ていてキレイだとは思うのよ。でもさ、想像やらテレビで見てている方がキレイだよね。実際に見るとこんなもんかつて気分になるのよね」

「ま、現実なんてそんなものでしょ？」男と同じ。妄想に恋しているのと現実の結婚は違うとこうこと」

考えただけでリアルに切なくなる。

「夢見せてよおおおおおおお」

「夜見なさい」

「……（泣）」

「まずは向き合ひ」とからはじめないと

「わかつちゃいるけどねえ」

やめられない。

スーザン節が脳裏を駆け巡る。無責任男ならぬ無責任女は現実を見ようともしない。

中途半端な自分。それが嫌なのに三十四回目の春を迎えても抜け出せない。

「それにしてもさ。三十四回目の春つてこいつと少しないよつた気がしない？」

「確かに」

「そう考えると季節の巡りなんてどうがんばっても三桁に達する程度しか体験できないんだよね」

「もつたいないよね」

「いわれてみればそうだ。

「年取ると時間の流れは速く感じるようになるけどたかだか三十回  
だと思つとまだまだやれちゃう気分にならない?」

「そつか。そうだよね」

「しみじみと呴いた。

「まだまだ若輩者じやん」

「元氣があれば何でも出来ちゃう?」

「あはは」

某有名な格闘家の言葉を思い出して笑つた。一発ぶん殴つてもら  
つたらさぞかし迷いなんて吹き飛びそうだ。

「痛みで飛ぶよね」

「痛いときなんて大概のこと忘れるよね」

「あれだ、暇だと無駄なこと考えるけど忙しい時はそんなの考えて  
いる余裕無い」

「まあね。忙しいっていう字は『心』を『亡くす』って書くわけじ  
ゃん? あんまり好きじゃないんだよね。仕事やプライベートで忙  
しい時はある種の達成感あるんだから心を亡くしていることは  
ないと思つし。そういう時ほど色々やつてているよね」

「むしろ忙しいといつ単語を使うと時つて面倒くさい時だよね」

「そうそう。忙しいのでまた今度お茶しましょうね。つてヤツ?」

「その通り!」

自分でも使用しているのだから人を責めるのはおこがましい話。

「自分にとつてどうでもいい人間がいるということはその人にとって  
自分がどうでもいい人間であることもあるわけなんだから」

「そうそう。人に嫌われたくなれば誰も嫌いにならなければいい  
のにという皮肉です」

皮肉を込めて笑いながら缶ビールを傾ける。もうカラだ。仕方な  
くもう一本空けた。どんだけ呑んだくれる気だ?

「そうだ、そろそろ投稿用の小説かなきやないんだけどネタどうす

る。」

「コレでいいんじゃねえ？」

「マジこれでいいの？」

程よくふわふとした気分になつてくる。ああ、世界が回る。

「ジャンルはどうする？」

「恋愛じゃないことは確かだね」

「面倒くさいから現代小説でいいじゃん」

「いいよね？」

相槌を打つてぐびぐびと缶ビールを飲む。ピッヂが上がつていく。  
「最後のシメは『もう一度、春を愛する』とか『はじめて』で、  
『いいじゃん。いかにもつまなくて』

「そうそう、荒波と葛藤を乗り越えて踏みにじるよに春を愛しう  
うじゃないか。

んねー

近くにいた公園の主と田があつて笑い転げた。主はぽかんとした  
顔であたしを見ている。

そりゃそうだろう。せつからずつと独り言でブツクサやつてい  
ればサラリーマンも公演の主も不審がること間違えない。

「かんぱーい

あたしは霞んだ空と薄紅の桜に杯を上げてビールを飲み干した。

もう一度、春を愛する」とからはじめるため。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0236e/>

---

葛藤の春

2010年10月8日15時55分発行